

## はじめに

2007年4月には「がん対策基本法」が施行され、がん検診の質の向上ならびに受診率の増加等を行うように指示されたので、本会のがん検診は順調に行われた。3年前に乳がん検診の増加を見越して女性検診施設（グリーンルーム）を改装し、マンモグラフィを増設するとともに、これを搭載した検診車を2台導入したので、乳がん検診受診者は増加した。その状況は、本会の坂佳奈子乳腺外科医が詳細に報告している。他方、2004年度に厚生労働省のがん検診の指針の一部が改正され、子宮頸がん検診は2年に1回でよいとされたので検体数が一時減少したが、都民のがん検診への関心の高まり等から今年度は検体数が増加した。なお、その検診成績やこれを取り巻く最近の話題については、慶應大学医学部の塚崎克己准教授、本会の長谷川壽彦検査研究センター長と伊藤良彌婦人検診部長が報告している。

また、2008年度から特定健診・特定保健指導が義務化された。このため健康についての国民の関心が高まり、地域・職域保健の定期健康診断、人間ドックなどの受診者数は増加した。なお、定期健康診断の実施成績は、聖マリアンナ医科大学の須賀万智准教授と吉田勝美教授がまとめられ、また人間ドックの成績は、本会の三輪祐一総合健診部長がまとめた。そして本会の健康増進部は、2007年度の保健指導の実施成績をまとめ、個別保健指導が増加していることを報告した。

学校保健の健診受診数は全般的に横ばいであったが、脊柱側彎症検診の受診数は昨年よりも多く、その成績と今後の問題等については、千葉東病院の大塚嘉則名誉院長が報告された。また、本会の貧血検診を指導してこられた日本医科大学の福永慶隆教授は「鉄と貧血」についての総説を執筆され、検診成績は前田美穂教授が報告された。心臓病検診を指導しておられる東京女子医科大学の浅井利夫教授は、その成績と、先天性心疾患を持ちながら成人となった患者の問題を述べられた。腎臓病検診を指導しておられる日本医科大学の村上睦美名誉教授は、検診成績と判定の問題点について報告された。糖尿病検診の成績は、日本大学医学部の浦上達彦講師が、小児の2型糖尿病の長期予後は女子栄養大学の和田操教授がそれぞれ報告し、頻度が増加しているが予後は改善していると述べられた。東京女子医科大学の村田光範名誉教授は、小児生活習慣病予防健診の成績とこれにかかわる学校保健の最近の動向を報告された。

水質、簡易専用水道、レジオネラ属菌、食品の各検査、作業環境測定などの生活環境検査は、本会の検査研究センターがわかりやすく報告した。また、東京都健康安全研究センターの矢野一好部長に最近関心ももたれているノロウイルスも含めた腸管系ウイルスについての総説を執筆していただいた。

母子保健領域では、性の健康医学財団の松田静治理事長に本会の性感染症検査の成績と最近の動向を解説していただいた。また、妊婦甲状腺機能検査の成績とその成果については、本会の百溪尚子内分泌科部長がわかりやすく報告した。新生児スクリーニング検査のうち、クレチン症は東京女子医科大学の杉原茂孝教授が、先天性副腎過形成症は東京医科歯科大学の小野真医師が、先天性代謝異常症は本会の検査2部がそれぞれまとめたが、1974年度から2007年度までの33年間に、PKUなどの代謝異常症を66人、クレチン症を340人、先天性副腎過形成症を89人発見し、障害の発症を予防し得たことを報告した。

このように2007年度の事業を達成できたのも、ご指導いただいている学界の諸先生のお陰であり、さらに東京都等の行政当局、東京都医師会、東京産婦人科医会等のご支援の賜物と心から感謝したい。

また、ご多忙のところ検査成績をまとめていただき、これをご執筆いただいた諸先生に感謝し、各方面で本年報を活用していただくことを深く希望して、お礼の言葉にします。

平成21年3月

財団法人 東京都予防医学協会  
理事長 北川 照 男